

平成22年度組織的な大学院教育改革推進プログラム  
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」  
「キャリア形成のための院生自主企画」実施報告

I. 自主企画の内容

(1) 企画の名称

「地域博物館の可能性 ―地域学芸員・博学連携・回想法―」

(2) 開催日時・会場

2010年11月19日(金) 15:00~16:30 S棟227室

(3) 講演者

辻村 朋子氏(東近江市能登川博物館)

(4) 企画者

竹端 絢子(人間文化研究科博士前期課程国際社会文化学専攻比較歴史社会学コース)

大杉 綾花(人間文化研究科博士前期課程国際社会文化学専攻古代文化地域学コース)

水科 典子(人間文化研究科博士前期課程国際社会文化学専攻古代文化地域学コース)

(5) 支援教員

前川 佳代(大学院人間文化研究科 国際社会文化学専攻特任助教)

(6) 参加人数

15名(内訳:[学内]教職員1名,大学院生7名,学部学生6名,[学外]1名)

(7) 自主企画概要

この企画では、滋賀県東近江市の東近江市能登川博物館(以下、能登川博物館)に2003年から勤務されている辻村朋子氏を講師としてお迎えした。講演でご紹介いただいたのは、常設展示を持たない能登川博物館の、小さいながらも総合博物館としてのユニークな取り組みである。

当館の活動における目線は常に地域に向けられ、地域住民や学校、福祉と協業して活動が行われているが、特筆すべきものとして地域学芸員の存在、博物館と学校教育の連携(博学連携)、回想法による福祉活動に関して紹介していただいた。

まず地域学芸員というのは、例えば昆虫、キノコ、草花等々に詳しい方々のような、地域にいる専門家で、展示や野外活動の補助をしてくれる人である。学芸員は万能ではないから、それぞれの得意分野に応じて住民にも指導役をしてもらうのである。また、小学校の社会の授業内容に関連した内容の展示を行ったり、職員が学校に出向いて、出前授業を行ったりと、学校教育との連携も密である。加えて、高齢者を対象とした回想法を用いた福祉活動にも力を入れ、収集した民具が認知症対策にも効果を上げている。お年寄りの脳は、昔自分が使っていた道具を見ることによって活性化するため、博物館に眠っている道具が認知症対策に役立つ上に、博物館側は民具の使用方法が分かり、貴重な記録となる。

これら能登川博物館の活動は、一般的な博物館像を覆すものだが、文化庁やマスコミも注目しており、博物館の一つの流れになりつつある。学芸員希望者はもちろんのこと、教員や福祉分野の職を目指す方に、地域の博物館を利用する方法、つまりは博物館の可能性を知ってもらいたいと考え、このセミナーを企画した。

お話を通し、地域住民の力を引き出し、住民とともに地域のための活動を博物館が担っていくことの重要性が認識できた。また質疑応答の際には、参加者からの意見・質問が多く出て活発な議論をすることができ、好評を得た。



博物館のユニークな取り組みを紹介する辻村先生

## Ⅱ. 実施報告

### 1. 講演内容

#### 1.1 能登川博物館の概要

能登川博物館は、図書館・埋蔵文化財センター・博物館の3つの施設が合同した旧能登川町総合文化情報センターの一部として1997年に開館し、現在は市町村合併に伴って「東近江市能登川博物館」として運営されている。小さいながらも総合博物館という位置づけであり、東近江市内の自然系や人文系、民俗など様々なことを展示・イベントの対象としている。

当博物館を建設する際に参考にされた考え方の一つが、『考古学の散歩道』（田中琢・佐原真著、岩波文庫、1993年）にある、「一度行ったら二度と行かない博物館」への言及であった。このような提言を踏まえ、当博物館では常設展示を設けず、毎月展示替えすることとなった。その展示スペースでは、博物館が年7回の企画展を行うほか、図書館・文化財センター・学校の卒業制作の展示も行い、毎月変えられている。展示を頻繁にかえることで、一度きりでなく何度も行きたくなるような博物館を目指しているのである。

また当博物館の構造上の大きな特徴は、学芸員室がオープンになっていて、展示スペースの続きに学芸員室があるように設計されたことである。来館者が学芸員に気軽に声かけやすい構造になっているのである。

利用者である地域住民は、自分の暮らしているところがどういう歴史・自然があるのかという地域に密着した情報を望んでいる。そういった情報を一方的に伝えるだけではなく、住民たちと一緒に活動をしている博物館でもある。

#### 1.2 地域学芸員について

能登川博物館と地域住民との深いつながりを示す存在として紹介されたのは、地域学芸員の活動である。当博物館では、現場に出る職員が3名しかおらず、なかなか展示・調査・研究のすべてに手が回らないので、地域の人に手伝ってもらっているところが大きい。

例えば自然系の企画においては、近くの自然を見直そう、身近な自然に気付いてもらおうというコンセプトで、地元の山や川でメダカ観察会・川の健康診断・キノコ観察会といったイベントを行う。そのような企画で講師を務めるのは学芸員ばかりではない。博物館近隣に暮らす人、水生生物調査会や野鳥の会、関西菌類談話会などに加入している地域学芸員に講師をしていただくことも多い。

それだけではなく、字の歴史や、民俗の分野に詳しい地域学芸員もいて、昔の道具や民具を紹介するイベントに参加してもらっている。当博物館の職員は30代、40代で、昔の道具の紹介をしても使ったことがあまりなく、しかも民具の専門家はいない。子供たちに教えるには、実際に使った方に聞いて、やってもらうのが一番学習になるので、そういう手の届かないところを

地域の人に手伝ってもらうことで、より詳しい情報を伝えることができる。

また当博物館のオープンな雰囲気からか、近隣の子どもたちが気軽にやってきて、手伝ってくれることもある。カブトムシの世話や魚の水替えをしてくれる子どもには、ジュニア学芸員として名札を作成しており、喜んで何度も来てくれる子が多い。

彼ら地域学芸員は、組織されたボランティアというよりは、やりたいからやっている、という様子で協力している人がほとんどである。また地域住民のもつ知識を活用することによって、より専門的だったり、地域のニーズに合致したりした情報が博物館にもたらされる。住民が知りたいのは地域の情報であるが、地域のこまごましたことはなかなかデータ化されず、資料もあまりない。地域から情報を集め、博物館で企画展をすることによって、展示内容の冊子やパンフレットという形でも地域の資料を作ることができる。また博物館が資料を提供するだけでなく、地域学芸員が自分で調査・研究された成果を博物館にいただき、企画展にするなど、企画の幅も広げることができる。

### 1.3 博学連携について

博学連携ということが最近言われるようになってきているが、能登川博物館においても学校と協力した企画を行っている。博物館にとって学校はお得意様という位置づけであり、学年に応じていろいろな活用をしてもらえるようにしている。

小学校との連携においては、3年生が1月・2月に昔の暮らしの勉強をする時期に合わせて昔の道具や暮らしを紹介する展示を行ったり、6年生に歴史の授業の導入部分で実物を見てもらったりと、学校の授業内容とリンクさせた企画展を行い、役立ててもらっている。また、合併して市域が広がったため、同じ東近江市内でも博物館まで気軽に来ることができない学校には、資料を持っていき、出前授業を行うこともある。

連携を行う学校は、小学校だけに限られているわけではない。中学生であれば職場体験の受け入れ、大学生であれば博物館実習やインターンシップの受け入れなどもしている。博物館実習に来た学生には小さな企画展を行うという課題が与えられるが、それをきっかけに地域学芸員として、博物館に運ばれた動物の骨格標本を作ってもらったり、地域の情報を持ちこんでくれたりする関係が続いている人もいる。

また学校として企画を行う中で、博物館は子どもたちの学習成果を発表する場を提供することもある。子供自身が展示をする企画があったり、また卒業する生徒の授業成果の発表をしたり、あわせて社会で活躍されている地域の先輩の紹介をしたりもしている。

### 1.4 回想法について

博物館と福祉とをつなげる取り組みが地域回想法である。回想法とは、1960年代にアメリカのロバート・バトラーという精神科医が提唱し始めた心理療法の一種である。お年寄りが懐かしい

ものに触れることで、脳が活性化され、認知症予防に効果があるとして注目されており、日本でも愛知県北名古屋市をはじめ、各地で取り入れられているものである。

最近では、高齢者の認知症予防だけでなくうつ・閉じこもりの予防にも有効性が確認され、東近江市でも独居老人の出歩く機会が増えるきっかけづくりの一環として、回想法が行われている。また道具を手を持つことでお年寄りたちが自然に体を動かし、道具を使って見せることも多く、それが運動機能の維持にも役立っている。

東近江市では平成16年からデイサービスなどでの回想法が実施されており、かつては能登川博物館の職員が民具を持って会場に出向いていた。現在では博物館と社会福祉協議会・市のいきいき支援課が合同で「地域回想法マニュアル」を作成、市で「回想きらりサポーター」というボランティアを育成して住民自身で回想法を行えるようにしている。指導する側になったサポーター自身も楽しんで、やりがいを感じて参加している。

このように地域で回想法を行うために、博物館では、「回想法セット」という日常生活の一場面や、四季をテーマとした民具セットを作り、貸出の要望に答えている。また小学校にも、昔の暮らしを知るために回想法セットを貸すこともある。

このような回想法への協力は、博物館側にとっても得るもの大きい。せっかく集めた資料を収蔵庫で眠らせることなく、有意義に使うことができるからである。しかも参加したお年寄りの思い出話を通じて、特別な調査をしなくても、民具の使い方や昔の能登川の様子などの情報が自然と集まり、それらも博物館の貴重な資料となるのである。

## 1.5 その他の連携・総括

大合併によって誕生した東近江市内には、合併前に作られた小規模な博物館が複数存在することとなった。それらの館が単独でできる広報活動には限りがあるため、共同のポスターや広報誌を作成したり、メール配信を行ったりして、イベントや資料の情報を発信している。

また、連携は教育や福祉の分野にとどまらない。企画の内容によっては、市役所の自然環境に関する部署や防災関係の部署など、さまざまな分野と協力して、地域に密着した情報を提供している。

このように能登川博物館では、教育や福祉分野だけでなくさまざまな人・機関と連携して活動し、人と人とのつながりを非常に重要視している。小さくても地域に密着した博物館にはさまざまな可能性があり、将来の職業や居住する地域に関わらず、何らかの形で博物館を利用できないか考えてほしいと考えている。

## 2. 質疑応答

講演の後に、30分ほど質疑応答の時間を設けた。参加者の間では博物館と地域住民との密接な関わり方に関心が高かったようであり、地域に密着した活動をすることで苦勞することはないのである。

か、展示に協力した地域の人の名前が大きく取り上げられることはあるのかなどといった、地域学芸員に関する質問が多く出された。

### 3. まとめ

能登川博物館は決して大きな博物館ではなく、職員が少なかったり、合併にともなう市域の拡大があったりなど、直面してきた課題も多い。そのような中で地域の人に親しまれる博物館が運営できている要因は、入りやすい雰囲気にしておくことで、人材や情報が集まりやすくし、地域とともに活動することにあるのであろう。

探してみれば、どこの地域の中にも専門家ともいえるべき、何かに詳しい人がいるはずなので、地域の中にある人材を発掘していくのが博物館の使命だと考えている、という先生の言葉は非常に印象的であった。先生のお話を通し、地域住民の力を引き出し、地域のニーズにあった活動を博物館が行うことの重要性と、そのおもしろさを認識できたと感じる。

また講演の後にもうけた質疑応答の時間には、参加者から質問が多く出され、またアンケートの回答をみても、非常に好評であった。参加者それぞれが、自らの体験も生かしつつ、これからの博物館のあり方、楽しみ方について考えることができ、有意義な時間になったといえるだろう。

(文責：竹端 絢子)



講師の話に聞き入る聴衆

**●アンケート集計結果（回答者 12 名）**

1. この講演会全体についての感想をお聞かせください。

- ・良い 8名
- ・やや良い 3名
- ・ふつう 1名
- ・やや悪い 0名
- ・悪い 0名

2. この講演会をどちらでお知りになりましたか。（複数回答あり）

- ・大学内のポスター 7名
- ・配布、郵送されたチラシ 1名
- ・大学のホームページ 0名
- ・企画者から 4名
- ・大学院G Pのメールニュース 1名
- ・その他 1名（知人より）

3. ご意見・感想などを自由にお書きください。

・奈良にいと、博物館のイメージは国立や県立、市立など大きな施設のイメージが強かったの  
で、このように地域に密着した博物館の話を知ることができてたのしかった。

・博物館と学校の連携は想像できましたが、博物館と福祉施設の連携は新しく、非常に勉強にな  
りました。博物館にはイメージ以上に、色々な可能性があることを知ることが出来ました。

・箱ものの博物館でなく、人が人を呼ぶ博物館であること、収蔵資料ばかりでなく、博物館に集  
まる人こそが貴重な地域の資料になっていると感じました。人的ネットワークの有効性を提示し  
ていると思います。みんなが楽しんでいる所がスゴイと思いました。

・友人に誘われて参加したのですが、地域の博物館の興味深い活動を伺うことができてよかった  
です。特に、地域学芸員の方についてのお話しはとてもおもしろかったです。

・私の出身地域は博物館がなく、地域学習は学校の先生方が一手に引き受けていました。今回の  
お話にあったような地域博物館があれば、より幅広く活発な学習ができますし、子供たちの教育  
や地域連携にも大きく貢献が可能だと思います。最近では若い世代とお年寄りの間に価値観の差が  
広がっていて、社会がギスギスしているように感じることも多いです。こういう博物館が地域の  
中心になって、世代間の交流が深まるきっかけになればいいなと思いました。機会があれば、私  
も地域学芸員として活動したいです。

- ・私は、去年、学芸員資格取得のために、奈良市内の美術館で 5 日間実習させてもらいました。その後は、ミュージアムサポーターとして美術館の企画展などの際に展示のお手伝いをさせていただいています。今回、講演を聞かせていただいて、勉強になることが多かったです。地域との連携や、子どもたちへの普及活動などの重要性が再認識できました。今日は、本当にありがとうございました。
- ・博物館のきめ細かいご努力や地域の知識を活用しておられることに感銘いたしました。ありがとうございます。
- ・教員免許をとっているので、「学校と博物館」についてのお話を聞けて、非常に興味深かったです。
- ・学芸員実習でお世話になった郷土資料館との共通点、また相違点を知ることができ、大変勉強になりました。
- ・分かりやすく、質問しやすい雰囲気でした。
- ・地域とのかかわり方や回想法の実施など、地域博物館としてのあり方をお聞きでき、博物館の新たな役割を意識させていただき、大変興味深かったです。